

テレビが箱根を変えてはいけない



WOWOW社長 田中 晃
たなか あきら

日本テレビが箱根駅伝を初めて放送したのは1987年である。全長200キロ超、初めての山岳ロード生中継にスタッフ700人が挑んだ。移動中継車の屋根の上でアンテナを振り続けた者、山頂に泊まりその電波を繋いだ者……総合ディレクターだった私も、放送を終えた時の安堵感は忘れられない。4部構成の視聴率は、第4部が20%を超え(世帯視聴率)、関東の大学のローカル大会がたたき出した数字としては衝撃だった。社内外から「全国大会にしたらどうか」という声が沸き起こったのも当然だった。

あれから35年、隔世の感がある。参加大学は5校増え、2021年の優勝タイムは当時より32分52秒も早い。放送時間は8時間から13時間に、スタッフは1000人に増えた。電波はデジタルに変わり、移動中継車の屋根の上は無人、箱根の山を綱渡りでアナログ電波を繋いだ当時が嘘のようだ。世帯視聴率は30%を超えることも珍しくない。

だが変わらないものもある。

湘南の海、箱根の山々、霊峰富士、沿道の応援、それと日本テレビの中継スタッフに今も受け継がれている言葉——「テレビが箱根

を変えてはいけない」「箱根を放送させてもらっている感謝の気持ちをお忘れしない」。初代プロデューサー坂田信久氏の言葉である。

大正9年に始まった箱根駅伝は、2023年で99回目を迎える。関係者のご努力のためのものであるが、忘れてはならないのが学生たちの情熱だ。ほとんどのスポーツ大会が禁止された昭和18年(1943年)、「靖国神社と箱根神社を往復して東海道に大和魂を鼓舞するために」と軍部を説得し、大会名も「関東学徒鍛錬継走」として走り、戦地に赴いた学生たち。昭和22年(1947年)、「箱根駅伝を復活させて日本に活力を取り戻そう」と、マラリアや栄養失調の中で走った学生たち。その後も学生たちの情熱で震災もコロナも乗り越えてきた。今も学生たちは全国から関東の大学に集まる。出場できるのはわずか20校、走れるのは1校10人。走った学生にも走れなかった学生にも箱根は重い。それが100年積み重なっているのが箱根駅伝である。

99回大会も、日本テレビのスタッフ1000人は、坂田さんの言葉を心に刻んで、渾身の映像を届けてくれるだろう。箱根駅伝中継の「タスキ」を繋ぐ彼らの情熱もかなり熱い。